

た、大口グラビティコーラーによる試料も分析の対象とし、最終的に中央粒径、平均粒径、および海上保安庁の分類基準に基づく底質名を明らかにした。

以上の分析結果と既存の底質図や2005年採取の試料などと比較・検討し、洪水によりもたらされ、現在も沙流川の旧河道跡に残留する泥質堆積物の詳細が明らかになった。調査研究結果については、5月下旬の調査研究成果報告会で口頭発表し、2月末に独立行政法人産業技術総合研究所で全体的な検討を行った。

7. 依頼調査

7. 1 地質環境の長期安定性評価のための古環境解析

(担当)：高清水康博

独立行政法人日本原子力研究開発機構からの依頼により、地質環境の長期的変遷を明らかにするために、幌延町下沼の砂利採取場の露頭の表層地質調査と堆積相解析を行った。表層地質調査では、この露頭の更別層の地質構造は、極緩く西傾斜し、層厚は17mで、基底よりシルト質砂層(約3.15m)、礫砂互層(約3.55m)、砂層(約2.8m)、泥層(約0.3m)、礫砂互層(約4.8m)、礫層(約2.95m)からなる。堆積相解析から、この地層がバリアー相、上部外浜相、海浜相および後背湿地相からなり、西側に海が広がる海浜-外浜やバリアーにかけての古環境を復元することができた。また、これらの累重様式から、調査対象とした地層は、2つの堆積シーケンスからなることが分かった。

7. 2 苔の洞門岩盤斜面変動調査

(担当)：石丸 聡・高見雅三

本調査は、苔の洞門運営協議会(事務局：千歳市)からの依頼により、岩盤温度分布ならびに現地の気象データに基づき、岩盤亀裂と凍結深度の関係から斜面崩壊の可能性について助言を行なうものである。苔の洞門運営協議会では、この助言を基に、苔の洞門内部を公開するかどうか検討を行う。本調査は、平成18年度に引き続き5月と11月に実施した。

2006-2007年冬は気温が高かったため、岩盤内の凍結深は例年より浅く、6月中旬には岩盤内の凍結範囲は無くなった。落石危険箇所を目視調査を行った結果、2001年時に落石危険箇所とした地点のうち、2006年崩落地点とは別の1箇所以小落石が起こっていたことを確認した。また、新たに2箇所、小落石の可能性のある地点を確認し指摘した。11月調査時には2001年に設置し、観測を続けてきた計測器を撤収した。

8. 各部計上調査研究

8. 1 上川支庁管内における地質・地下資源調査

(担当)：川上源太郎・大津 直・廣瀬 亘・鈴木隆広・小澤 聡・田近 淳

本研究は、上川支庁管内において農業農村整備事業をはじめ各種公共事業等により実施されてきた膨大な地質調査データを収集・編纂し、GISベースの地質図・ボーリング柱状データベースおよび解説書として整備し、農業農村整備事業の円滑な推進に資することを目的としている。調査は平成19年度から3ヵ年で実施する予定で、上川支庁管内を南部・中央部・北部に3区分し、各地域に1年をかけて行うで計画である。平成19年度は上川南部地域(富良野市・上富良野町・中富良野町・南富良野町・占冠村)について事業を実施し、地盤ボーリング資料の収集・整理・電子化、縮尺1/5万での地質図の編纂